

133. 虎姫町五村遺跡出土の L字形筒状土製品

1. はじめに

五村遺跡は湖北の主要河川姉川によって形成された自然堤防上に立地する弥生時代集落遺跡である。

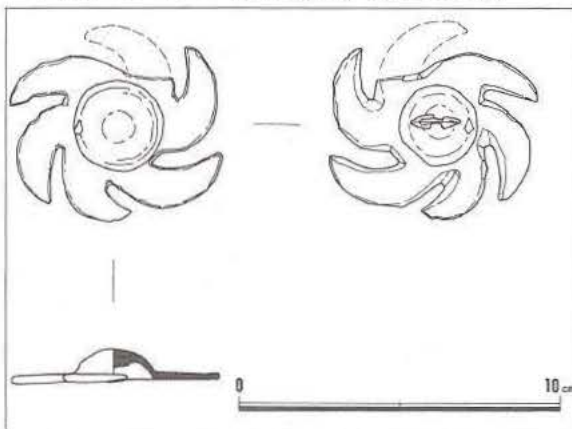
1979年に実施されたは場整備事業に伴う調査では、弥生時代方形周溝墓3基・溝・土壇等が検出され、大量の弥生土器・灰釉陶器・緑釉陶器・木器類が出土した。

特筆すべきは弥生時代後期包含層中より出土した巴形銅器で、全国でも弥生時代のもは10数遺跡でしか発見されていないものである。左振り・6脚という形態ながら産径指数等から古墳時代のそれへの過渡的なものとして位置づけられている(第2図)。

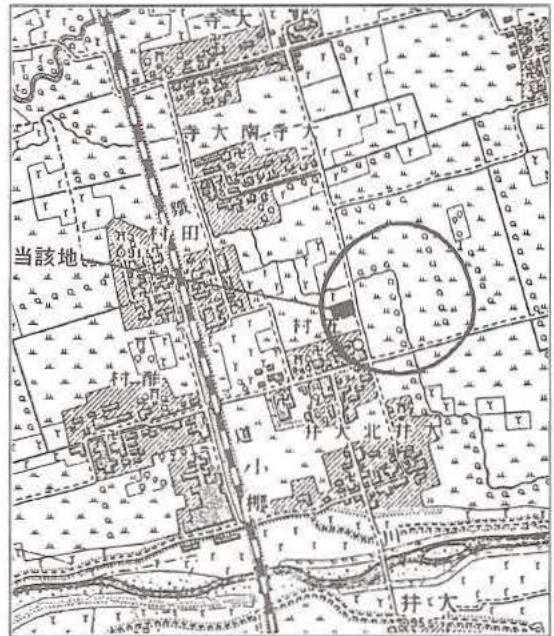
その後2回にわたる虎姫小学校改築に伴う調査の際にも大量の弥生土器が溝や落ち込みの中から出土した。その年代も1979年調査時のものとはほぼ同時期であり、畿内の資料で述べると、唐古・鍵遺跡第45号竪穴土層出土資料にはほぼ並行するものである。

2. 調査の経過

今回の調査は1984年9月10日に表土並びに灰色粘土(第2層)除去をもって開始した。給食センター建物予定部分に約25×12m、浄化槽予定部分に約5×3mの調査トレンチを設定し、それぞれT1・T2と称した。基本的に20~30cmの表土(耕土)を剥ぐと黄色プロ



第2図 五村遺跡出土巴形銅器(註による)



第1図 位置図(2万分の1・明治26年)

ックを含む灰色粘土層(第2層)があらわれる。これは20~40cmの厚さをもち無遺物層である。この下に暗灰色粘土からなる遺物包含層(第3層)があり、部分的に暗茶褐色のスクモを含む。30~40cmの厚さで堆積している遺物包含層である第3層はほぼ水平堆積を示しており、多少の時期幅を示すもののは弥生時代後期を中心とする包含層である。人力によるこの包含層掘削の結果、弥生土器の他、木製品・土製品が出土した。

T1では中ほどより北と南端付近で遺物の集中が見られ、部分的に径0.7~数mの落ち込みが何か所かにあり、そこでは良好に土器並びに木製品が遺存していた。

弥生土器は北陸系・東海系の甕や高環などを混在しながらも湖北地方特有のものが基本となっている。

木器としては織物道具である全長77cmの簾(ちきり)が1点見られ、先を切先状に加工した全長222cmの槍状木製品など数点の加工痕のある木器も出土した。

3. L字形筒状土製品について

T2でもT1とはほぼ同様の堆積状況を示しており、特にこの第3層からはL字形筒状土製品と呼ぶべきものが出土した。最大長44.1cmのもので、断面ほぼ円形



土製品出土状況

の筒状のものの先を直角に近くカーブさせ、両端共横方向にきっちりと切断した完成品である。

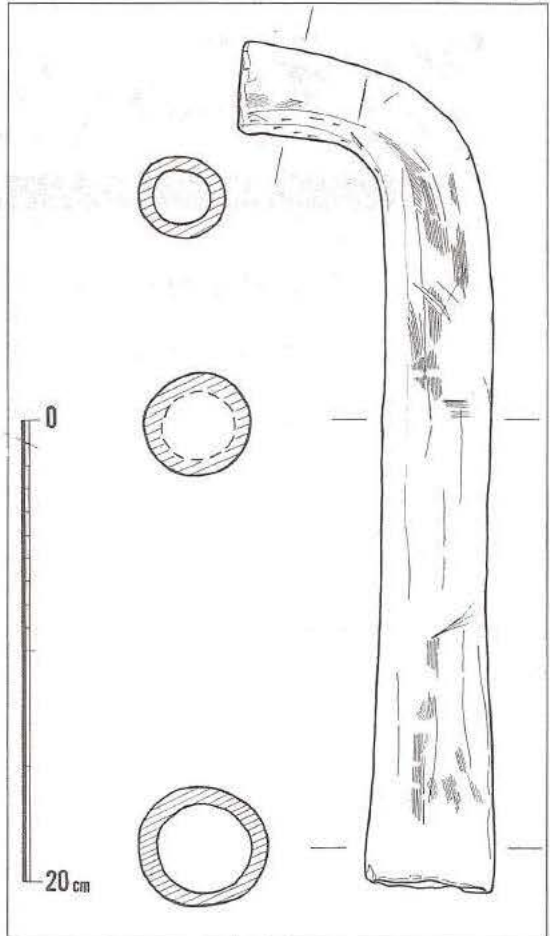
直径は2.4~5.6cmを計り、器壁の厚さ約0.5~0.7cmでカーブする側に向かってやや径は小さく器壁もやや薄くなっていく。外面はへら削りによっておおむね丸く仕上げた後に板ナデと指ナデによって基本的に縦方向に調整して、平滑に仕上げている。両端付近は横方向に幅2cmほどにわたってナデ仕上げが施されている。内面は観察される限りにおいては、横方向のへら削りが施される(第3図)。

淡茶褐色を呈する胎土は比較的精選されているようで、0.5~1mm大の砂をわずかに含み、焼成は良好で堅緻である。

また径の小さい方の口縁を一方の口縁に差し込むと仮定すると、端部からはほぼ5cmほど中におさまるようである。

伴出土器や胎土・調整等から、弥生時代後期の所産であることは間違いないが、類例は管見の限りでない。

唐古・鍵遺跡や東奈良遺跡から出土した青銅器鑄造に関するライゴの羽口に形状は類似するが、器壁はそれらより薄く、胎土もきめ細かくていねいな調整がな



第3図 L字形筒状土製品

れている。いずれ用途は明らかになるであろうが、熱は全く受けておらず、細かな胎土や調整から何らかの液体を通すものとも考えられる。(用田政晴)

註 林 純「滋賀県虎姫町五村遺跡出土の巴形銅器に就て」『土盛』第11号 1980年

134. 新草津川改修工事に伴う 調査(下)

—近世の用水路と水田跡—

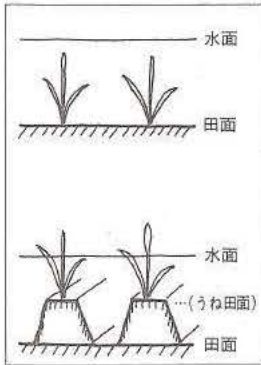
2. 遺 構

水田跡 水田跡は、D-Y・D-N両調査区で検出された。これらの水田跡は、第1次用水路に対応するものであり、第2次用水路に対応するものは検出できなかった。また、畦畔の方向は、D-Y調査区では用水路に直交し、N23°Wであり、D-N調査区では途中で軽く屈曲して北へかたよる。各畦畔間の距離は南北方向はわかるが、東西方向は不明である。D-Y調査区

では約8~22mあり、D-N調査区ではそれがわかる水田は一面であり、約11mであった。

この水田跡で目をひく点は3点ある。それらの3点は、低湿田によってもたらされた特徴であると考えられる。

第1に、D-Y調査区の西端部の水田とD-N調査区の南西部の2枚の水田の畦畔内で、畦畔にはほぼ並行した「うね」が見られることである。このような水田を付近の人々は「うね田」と呼んでおり、特に深い湿田での農耕技法である。このように深い湿田では、苗が水面上へ出るまでに腐朽してしまったり、また、わずかな増水によっても簡単に冠水してしまうために、畠のような「うね」を作り、その高い面に苗を植えつ



第3図 うね田

けるのである。このような「うね田」では、日照りがよほど続かない限り、底部には常に水がたまっていたそうである。また、この地域では敗戦後も何年間かはこの農法が行われていたという(図3)。

第2として、土壤の解説書によれば、干拓地水田で、干拓後10年を経た耕作土の下層は還元層であって、すき床や酸化層は発達していないが、50年後ではそれらが明確に区分できるとされている。ところで、当遺跡で検出された水田の層は、若干の砂を含んだ強粘質の土層であるが、まだまだ酸化はされていない。しかし若干の鉄分が含まれていた。また、この層の下層は、約半分が還元性の粘土層であり、あとの半分はマンガンの集積層(マンガン団塊層の部分もあった)であった。したがってこの水田は、粘土層やマンガン集積層が発達するような低湿地や沼を初めて水田化したものであると考えられる。また、耕作土の下層が、より下層とは明確に区分し得るが、50年後の土壤のような酸化層とはなっていないことから、水田化後20~30年程で洪水にみまわれたものと考えられる。

第3に、D-Y・D-N両調査区の畦畔に取排水用の水口があったが、特にD-Y調査区西端にある水口の底には、漆器が1個伏せておかれてあった。このことイデオロギー的解釈は難しいが、おそらく、湿地における排水の問題に係わってくるものと思われる。

年代 用水路内からは、染付の破片がかなり出土したが、それらは元禄期(1688~1704)を中心とする時期のものである。

ところで、用水路は2時期に区分できるが、遺物を区分するのはかなり難しい。したがって、これらの遺構の年代としては、近世前半として考えておく。

3. 近世前期における低湿地水田化の持つ諸問題一課題の整理

ここでは、低湿地の開発が持つ歴史的意義を考える場合、当遺跡の持つ問題を、近世前期における低湿地水田化の開発の持つ一般の問題とあわせて検討しながら、整理しようと思う。

<技術史的問題>

④用排水技術とその系譜 当遺跡のような低湿地を水田化するにあたって、まず出てくるのは、排水の問題である。排水技術は、日本列島に水田稲作農業がもたらされて以来の古い歴史を持つものではあるが、各時代の用排水路の持つ特徴・画期を把握した上で、当遺

跡の用排水路を位置づける必要がある。

その際、当遺跡は北川という氾濫河川の近傍にあり、当遺跡が含まれる御倉村には、「膳所藩から資金を借用して北川を改修した」という伝えがある。さらに、小出博氏によれば、利水は治水に先行するとされていることなどから、北川をも含めて検討する必要がある。

⑤土木具・農耕具 ここで問題となるものは、低湿地開発や用排水路の掘削とその維持管理に使用する土木具および湿地の耕作に使用する農耕具である。さらに、当遺跡は前述したごとく「うね田」という農法によるものであることから、農耕具もある程度の特異化がなされている可能性もある。

以上のような、土木具・農耕具は、当遺跡では明らかにできないが、民俗学や農業技術史等の成果を学ばねばならないだろう。

ところで、土木具や農耕具は、生産力構成要素の中でも、生産手段の中の労働手段としては最も重要なものとされており、それらの事を当遺跡から考察することも重要であろう。

⑥「うね田」技法とその系譜 この技法については前述したので詳しくはふれないが、湿地の中でも特に強い湿地に用いられる。この「うね田」技法を、「うね田」肥培技術とともに、湿地農耕技術の中に位置づける必要がある。その際、乾田技法との相互関連に留意する必要がある。

以上、技術史的側面についての課題を述べてきたが、その他にも、開発技術や労働手段の所有者の問題、開発時の労働力の組織形態の問題が残されたが、これらは社会的側面の比重が大であるので後述する。

<社会的側面>

近世前半期、特に元禄期を中心にして農村のおかれている状態については、一般的に、小農村落の完成期とされている。すなわち、自家労働力のみによって生産と再生産をなし得る農家(小農家族)が中心となって共同体をなす村落が、近世初頭の諸検地を契機として形成されてくるが、そのような小農村落は、17世紀中葉から後半にかけての「小前騒動」等を画期としてほぼ成立したとされている。この小農村落成立過程は、かつての名主層の家父長制的ウクラードに対して、下人・被官層による自立化と小農的ウクラードが優越する過程がある。さらに以上のような小農的ウクラードが家父長制的ウクラードに優越していく基底には、小農的農法の成立がある。つまり、深耕の不可能な、長床犁等を使用し、下人労働力の単純協業による粗放農法を特質とする家父長制的ウクラードに対し、深耕の可能な鉄製鋤・鋤を使用して自家労働力を集約することを特質とする小農的農法が成立することによって、また、狭小で散在的ではあるが新しく耕地を開発するこ

とによって下人労働から解放されつつ、小農として自立度を強めていく、とされている。

17世紀前半において経済的自立を達成した小農層は、そのことを基盤として、17世紀中葉から後半にかけて政治的・社会的自立と平等を求めて、いわゆる「小前騒動」を闘うことによって、近世の小農村落構成を形成するとされている。

当遺跡の水田は、元禄期を中心とするものと考えられるが、上述のごとく一般的状況と比較してどのように認識されるのであろうか。ここでは、このような問題意識をもとに課題を整理することにしよう。

ところで筆者は『御倉文書』等、具体的史料にあたっていないので具体的に言及することはできないので、可能性のみについてふれることにする。

⑧開発主体 元禄期の御倉村における開発、特に当遺跡の水田開発主体としてはいくつか考えることができる。第1に個別的小農、第2に地主層、第3に藩権力、第4に村落全体（共同体）である。

ところで、当遺跡のような湿田開発には排水設備が必要不可欠であって、それは前回に述べた第1次および第2次の用排水路である。このような用排水路を伴った開発は、小農が個別に行える可能性はほとんど考えられない。また、地主層について言えば、17世紀後半期、小農村落が一応の成立を見た時期には、家父長制的ウクラードも変質して地主的ウクラードとして成立している。そしてこの時期に地主層は、かえって耕地集積を顕著に行っていることが指摘されていることから、当遺跡水田の開発主体は御倉村の地主層であった可能性は考えられる。

次に、藩権力が主体になって開発を進める可能性は、まったく否定し去ることはできないにしても、少ないと思われる。藩権力が開発に係わるとすれば、開発の奨励や資金の貸付けなどではないだろうか。

最後の可能性としては、御倉村全体が主体となって開発を行う点である。そして、この可能性が最も高いと思われる。すなわち、大量の労働力を動員しなければならないこと、用排水路を設けるにあたって、農民の持つ土地を利用することになるが、それについての問題を調整しなければならないこと、また、農作業のサイクルに合わせなければならないことなどの諸点があげられる。

⑨開発技術の所有の問題 近世における水田開発の技術は、技術史的問題でも述べたが、ここでは中世的技術をどのような人々が受けつぎ、御倉村における水田開発を指導したのか、という問題となる。この開発技術の問題の中には、農業土木の側面と労働力の配分、組織化の側面が含まれる。そして、この問題は生産力の発展を担った階層を明確にする上でもきわめて重要

な問題である。

⑩労働力の動員と組織の問題 これは⑧の問題とも係わり、また、御倉村の持つ村落共同体のあり方とも係わってくる問題である。さらに、⑤で述べたように、労働力の組織化は生産力の問題である。

〈生産力の問題〉

社会の歴史的变化の基底には生産力の発展があることは周知の事実である。

では、水田は生産力概念の構成要素としてはどのように位置づけられねばならないのであろうか。

ところで、生産力概念の構成要素を生産手段の一部である労働手段の中のさらに一部である生産用具（長床犁・鋤・鋤）等と労働力だけに限定する説があり、また土地（＝水田）を含めなければならない、とする説があつて確定はしていない。しかし、日本の前近代においては、水田耕作が社会の支配的生産をなし、水田は其中でも必要不可欠な要素であった。また、耕地の存在形態と生産用具との連関形態が中世の生産力と社会の質を規定し、それを否定することから近世社会が成立したとする有力な学説もある。したがって、水田の存在形態を欠いた生産力説には重大な誤りがあると考えられる。

水田は、耕作過程においては、耕起や肥培労働の対象として、また、稲を育てる容器として、多面的要素を持ち、単純ではないが、水田を生産力概念の中に位置づけることは日本前近代における生産力発展研究においてきわめて重要な問題であらうと考える。

〈水田開発の持つ歴史的意義〉

ここでは、水田開発が、その後の御倉村にどのような歴史的变化をもたらしたのであろうか、ということが課題となる。

第1に、新しく開発された水田は誰が手に入れたのか。第2に、その結果村落内部の階層構成にどのような変化があったのか。第3に、藩権力の収奪方法にはどのような変化があったのか。第4に、以上の問題を総括した歴史的变化はどのようなものであったのか、等々の諸課題が展望される。（造酒 豊）

註① 前田正男・松尾嘉郎『図解土壌の基礎知識』農山漁村文化協会 1974年

② 小出 博『利根川と淀川』中公新書 1975年初版

③ 高橋昌明「日本中世農業生産力水準再評価の一視点」（『新しい歴史学のために』1977年8月15日号民科京都支部歴史部会）所収

④ 小作として自立することも含む。

⑤ 葉山楨作「近世前期の農業生産と農民生活」（新版『岩波講座 日本歴史10近世2』）所収

⑥ 註③に同じ